

葬儀構造の変化の方向性

— 仙台市の斎場の利用圏 —

阿留多伎 真人・渡邊 千恵子

Utility condition of funeral facilities in Sendai

Makoto Arutaki, Chieko Watanabe

本研究は仙台圏の斎場と寺院の立地状況と葬儀の利用圏について地域計画の見地から分析したものである。戦後のわが国の葬儀は一族の葬送の儀式から社会的儀礼としてのイベントと化してきた。特に高齢化社会が始まった1990年代以降の斎場数の急激な増加は仙台圏の葬儀構造を大きく変えている。1990年以降、仙台市では寺院葬が減少し斎場葬が急増している。利用圏でみると、斎場の利用圏は3.09kmで、寺院の利用圏の2.96kmとほぼ同じであった。これは斎場が寺院と同様に地域の葬儀の場となっていることを示しており、複数の斎場を地域ごとに設置している業者もあらわれている。斎場別にみると、新しい斎場ほど利用圏は狭く、郊外部や交通条件の良い都心部に立地する斎場の利用圏が広がった。しかし、今後、葬儀の私事化が進むと考えられ、散骨や自然葬、家族葬など様々な葬儀スタイルが斎場の立地に与える影響を分析する必要がある。

キーワード：葬儀、斎場、利用圏、葬儀の私事化、立地

1. はじめに

明治以降のわが国の右肩上がりの社会経済の傾向は生産や生活のスタイルを大きく変えてきた。戦前から現代までをみても、大家族制から核家族制へ、地縁血縁のコミュニティからプライバシー社会へ、相互扶助から自助努力へと変わってきている。さらに最も保守的といわれる結婚や葬儀における生活儀式でさえも、血縁者を中心とした儀式から社会的な儀式へと変わってきている。

これらの変化は、家単位で行われていた儀式が社会的な儀式となり、伝統的儀式が近代的儀式へと変わってきたことを示している。特に、死者を送る儀式のように死生観、宗教観といった精神的な側面によって規定される面が強いと思われる葬儀でさえも、近年、宗教施設葬から斎場葬へと変わってきており、

社会的関係や社会的な影響を強く意識していると考えられる。この傾向は1990年代以降顕著に現れており、バブル期には葬儀さえも豪華さを競うようになっていた。

一方、プライバシー意識の拡大などの社会的な意識の変化がライフスタイルを私事化しはじめており、葬儀においても家族葬のような私事化された儀式も行われ始めている。

そこで、本研究は、仙台市居住者の葬儀を対象に、斎場の立地構造や利用圏を解明することで、社会の変化やライフスタイルの変化を捉えることとした。

2. 課題と方法

(1) 仙台圏の斎場と寺の立地状況の把握

- ① 仙台圏の斎場の立地年表を各施設のホームページ等から作成した。
- ② 斎場等の住所から立地箇所を地図上に落と

し、立地動向を把握した。

(2) 仙台圏の斎場の利用圏の把握

斎場等の利用者の居住地と斎場の位置から利用圏を把握し比較した。

- ①平成16年度に河北新報に新聞掲載された死亡広告(葬儀情報)から利用者(喪主)の住所、葬儀会場の住所等を入力した。
- ②利用者の自宅と斎場の住所から経緯度座標をインターネットの地図情報サービスを用いて求めた。
- ③利用者の自宅と斎場の経緯度座標値から2点間の距離を求めた。
- ④斎場ごとに利用者の居住地を地図上に散布図として落とし込み、2点間の平均距離を求め、利用圏とした。

(3) 斎場の立地と利用圏の関係の把握

斎場の立地年や斎場の立地場所(都心からの距離)、経営する斎場数等によって利用圏がどのように変わるのか、グラフ等を用いて分析した。

3. 調査概要

(1) 葬儀情報の概要

河北新報・朝日新聞に平成16年度に掲載された葬儀情報は1537件で、通夜は1242件、葬儀は1390件であった。(表1)

表1 仙台市における死亡広告(葬儀情報)の概要
単位:件

項目	通夜	葬儀	告別式	お別れ会等
斎場	881	898	44	4
寺院	113	417	39	0
その他	6	16	4	2
自宅	242	59	9	0
掲載数	1242	1390	90	6

注) 葬儀、告別式、お別れ会等の重複があるので、総数は1537件にはならない。

(2) 利用圏の図示方法

- ①斎場や寺の位置は都心(仙台駅前交差点)を原点とする散布図にプロットした。
- ②利用者の居住地も斎場等と同じ散布図にプロットした。
- ③都心・斎場間距離は原点(都心)から斎場

までの距離とした。

- ④平均利用距離は、斎場等から利用者の居住地までの距離を算出し、施設ごとに平均を求め、散布図に円で表示した。
- ⑤利用者の重心は利用者の居住地のXY座標をそれぞれ平均して求めた。
- ⑥重心からの平均利用距離(実利用圏)は重心から利用者の居住地までの距離の平均を求めた。

図上にプロットした内容は、斎場の位置、利商社の居住地、斎場と利用者の居住地の結節、利用圏である。(図1)

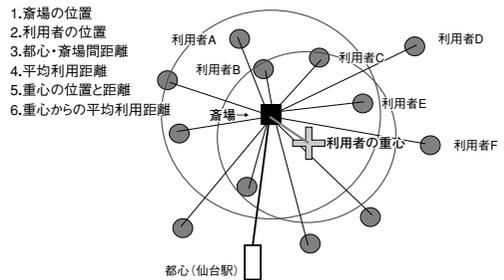


図1 利用圏の図示方法

実際の利用圏は、施設と利用者の居住地を直線で結び、その距離の平均を半径とする円を利用圏として書き加えた。(図2)

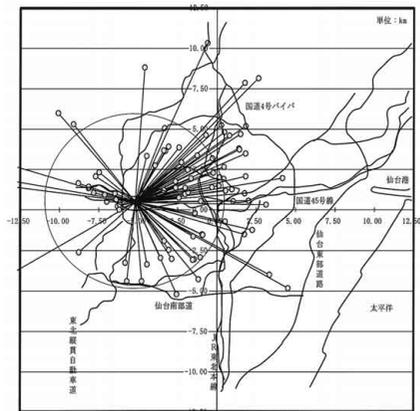


図2 斎場の利用圏の図示方法

4. 結果

(1) 葬儀情報の特徴

平成16年の河北新報及び朝日新聞に掲載

された、仙台市内居住者による死亡広告（葬儀情報）件数は1537件で、平成16年度の死亡者6,112人の25.1%であった。この掲載率は平成6年の34.6%⁶と比べて10%以上も減っており、プライバシー意識が浸透するとともに、葬儀の私事化が始まっていると考えられる。

死亡広告に掲載された通夜や葬儀の会場についてみると、斎場で通夜を行ったものももっとも多く、881件57.3%となっており、自宅が242件15.7%で続いていた。寺院は113件で自宅の半分にも満たなかった。一方、葬儀の会場を見ると、斎場が898件58.4%ももっとも多く、寺院の417件27.1%が続いている。自宅での葬儀は59件で通夜の約24.4%しかなかった。（表1）

喪主の居住地は青葉区が483件で31.5%と最も多く、若林区が236件15.6%で最も少なかった。（表2）

表2 葬儀情報における喪主の居住地

項目	青葉区	宮城野区	若林区	太白区	泉区	その他
件数	483	260	236	316	239	1
比率(%)	31.5	16.9	15.4	20.6	15.6	0.1

(2) 斎場の立地状況

仙台圏の斎場は平成になるまでは1箇所しかなく、平成3年から雨後の竹の子のように急増している。その多くは仙台市内に立地しており、昭和40年代以降に郊外に建設されたニュータウンやショッピングセンターとは異なる傾向を示している。平成16年以降は1件のみとなっており、立地競争が一段落していると考えられる。（図3）

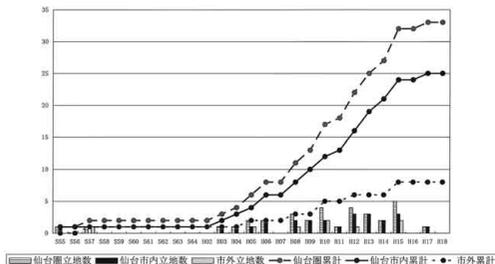


図3 仙台圏の斎場の立地状況

また、その立地場所は、地下鉄やJRの沿線に多く、郊外部にあっては幹線道路沿いに立地しており、交通条件が重視されていることがわかる。交通条件が重視されるのは、参列者の利便性を考慮したためで、現代は葬儀の社会化の頂点にいることを示している。（図4）

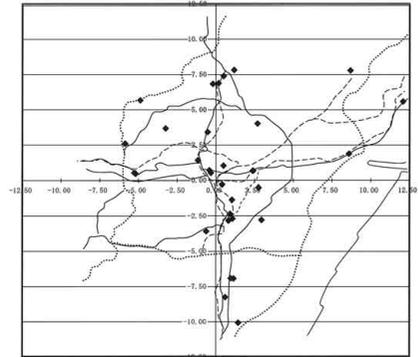


図4 死亡広告に掲載された斎場の位置図

一方、仙台圏の寺院の立地状況は、江戸時代から寺院が集積している仙台駅東口付近と北山に多いものの、仙台市内全域に分布しており、集落や地域ごとに寺院がつくられていることがわかる。（図5）

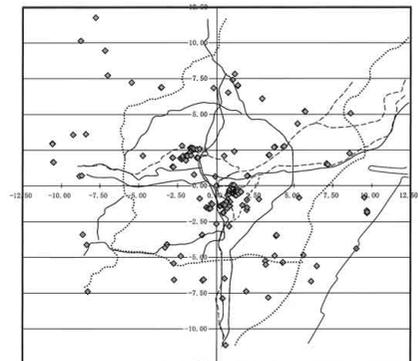


図5 死亡広告に掲載された寺院の位置図

(3) 斎場ごとの利用圏

斎場ごとに利用圏を見ると、斎場と自宅との距離の平均値（施設利用圏）は3.09km（施設ごとの平均）で（表3）あり、寺院の利用圏は2.96kmで、斎場の利用圏とはあまり違わなかった。

表 3 葬儀情報に掲載された葬儀会場と利用圏の概要

	経営母体		開設年	X座標	Y座標	都心からの距離	葬儀件数	平均距離(利用圏)	利用者の重心のX座標	利用者の重心のY座標	重心と自宅との距離(実利用圏)	重心と斎場との距離		
1	S記	1	S記(泉区)	1992	-0.19	6.84	6.84	277	64	2.98	-1.04	6.55	2.99	0.900
		2	S記(青葉区)	1998	-0.32	0.52	0.61		56	3.27	-0.18	0.54	3.27	0.132
		3	S記(太白区)	2001	-0.61	-3.58	3.64		74	2.23	-1.24	-3.79	2.14	0.662
		4	S記(若林区)	2002	2.87	-0.94	3.02		25	1.64	2.83	-1.63	1.50	0.688
		5	S記(宮城野区)	2003	2.69	4.02	4.84		38	1.89	2.13	3.98	1.30	0.558
2	S苑	6	S苑(青葉区)	1991	-1.15	1.42	1.83	151	121	3.07	-0.96	1.55	3.05	0.234
		7	S苑別館(青葉区)	1997	-1.15	1.42	1.83		30	3.41	-1.26	1.60	3.41	0.208
3	A社	8	A社(青葉区)	1993	-5.18	0.47	5.20	130	96	5.39	-2.73	1.21	4.64	2.553
		9	A社(泉区)	1998	0.50	7.39	7.41		15	2.37	1.30	6.40	2.13	1.271
		10	A社(宮城野区)	2002	2.76	-0.50	2.80		19	1.79	2.40	-0.25	1.80	0.440
4	B社	11	B社(青葉区)	1996	0.40	-0.28	0.49	114	65	3.72	-0.26	-0.13	3.78	0.679
		12	B社(泉区)	1998	0.18	6.88	6.88		20	3.56	-1.64	6.35	3.54	1.896
		13	B社(若林区)	1999	2.95	-2.78	4.05		13	2.23	3.92	-2.83	2.05	0.970
		14	B社(名取市)	2000	0.61	-8.25	8.27		16	4.41	-0.57	-4.91	3.49	3.534
5	単独	15	K社(青葉)	1994	-0.42	0.71	0.82	69	2.94	-0.96	0.89	2.90	0.573	
6	G社	16	G社(塩釜市)	1993	12.28	6.09	13.71	51	1	11.97	0.58	3.57	0.00	12.231
		17	G社(多賀城市)	1996	10.90	2.79	11.25		4	1.89	7.93	1.57	1.56	3.215
		18	G社(青葉区)	2000	2.09	4.25	4.74		15	2.92	1.25	4.34	2.34	0.840
		19	G社(宮城野区)	2003	8.59	1.87	8.79		31	2.54	8.37	1.07	2.01	0.835
7	単独	20	Kや(若林区)	1995	1.04	-1.36	1.71	31	2.37	1.54	-1.37	2.28	0.499	
8	Hだん	21	Hだん(青葉区中山)	1997	-3.24	3.68	4.90	30	13	0.96	-2.95	3.90	0.97	0.364
		22	Hだん(青葉区宮町)	2001	0.50	1.04	1.15		4	0.63	0.83	1.45	0.50	0.526
		23	Hだん(青葉区台原)	2003	-0.53	3.41	3.45		13	2.57	-1.74	3.93	2.28	1.318
9	H殿	24	H殿(塩釜市)	1982	12.09	5.58	13.31	24	2	5.51	6.71	4.56	0.65	7.048
		25	H殿(青葉区)	1996	-5.85	2.59	6.40		20	3.66	-4.33	3.23	2.80	1.652
		26	H殿(利府町)	2003	8.69	7.78	11.66		2	6.85	3.21	3.88	3.32	6.717
10	単独	27	W源	1998	0.83	-2.83	2.94	12	2.5	1.00	-4.61	1.95	1.796	
11	単独	28	Mサトー	2000	1.08	-2.68	2.89	8	1.5	1.43	-2.97	1.46	0.455	
12	単独	29	H堂	2001	2.38	0.67	2.47	6	1.02	2.98	1.23	1.12	0.824	
13	その他の斎場(6箇所)		—	—	—	—	15	—	—	—	—	—		
14	県外の斎場(2箇所)		—	—	—	—	2	—	—	—	—	—		
15	仏教寺院(130箇所)		—	—	—	—	418	2.96	-0.14	-0.19	5.99	—		
16	その他教会等(6箇所)		—	—	—	—	11	—	—	—	—	—		
17	斎場・寺院等以外(3箇所)		—	—	—	—	3	—	—	—	—	—		
合計			—	—	—	—	1537	—	—	—	—	—		

① S 記

S 記は新興葬儀社のひとつで、1985年に創業し、1992年に斎場を設置したのを皮切りに現在は斎場を5箇所を設置している。利用圏は1.64～3.27kmと幅があるが、都心や開設年の古い斎場の利用圏が広い。重心とのずれも0.1～0.9kmと小さく、中央の広域型と郊外の地域密着型をうまく展開しているといえる。(図6)

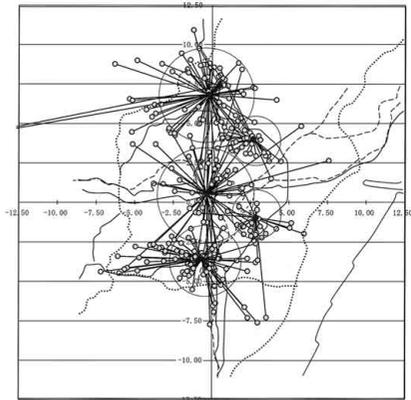


図6 S記の利用圏

② S 苑

S 苑は1991年に都心近くに設置された斎場で、1997年に隣接地に1000人収容の仙台市内最大の別館を建設した。斎苑の利用圏は3.07kmで別館は3.41kmで別館のほうの利用圏が広い。また、重心とのずれは本館、別館とも0.2kmと小さく、地域的な偏りなく利用者を集めていることがわかる。(図7)

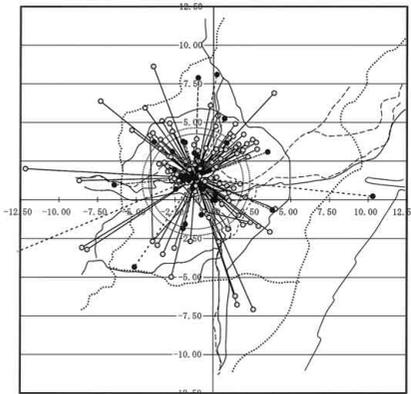


図7 S苑の利用圏

③ A 社

A 社は1961年に設立された互助会を起源としており、K社とともに仙台の葬儀の老舗のひとつとして葬儀を取り仕切ってきた。1993年には仙台市郊外に大規模な斎場を整備し、郊外型の斎場のさきがけとなっている。この利用圏は5.39kmと他の斎場の倍となっており、互助会組織が仙台市全域に浸透していることがわかる。一方、中規模の斎場が交通至便な場所に増加していることに対応し、1998年と2002年に2箇所を斎場を設置した。この2つの施設の利用圏はそれぞれ1.79km、2.37kmであることから、地域ニーズに対応していることがわかる。

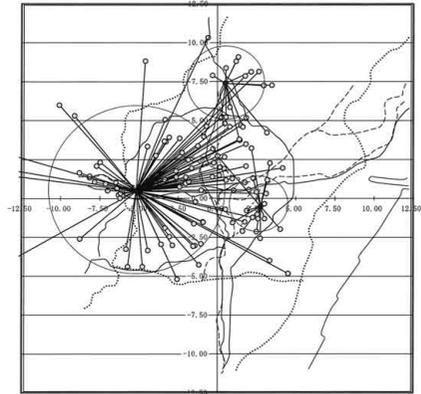


図8 A社の利用圏

④ B 社

B社は関西の冠婚葬祭互助会を起源とする葬祭業者で、近年は全国展開が著しい。仙台圏では1996年に斎場を設置して以来、多店舗展開をしている。利用圏は2.2～3.56kmで、立地によってかなり違いがある。旧市街地では短く、都心や郊外で長い。重心とのずれは0.7～3.5kmで、市内の業者と比べると利用者の重心とのずれが大きいようだ。

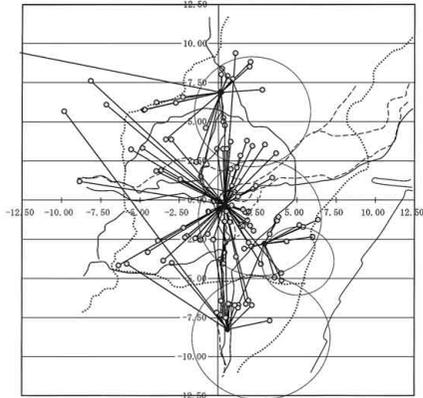


図9 B社の利用圏

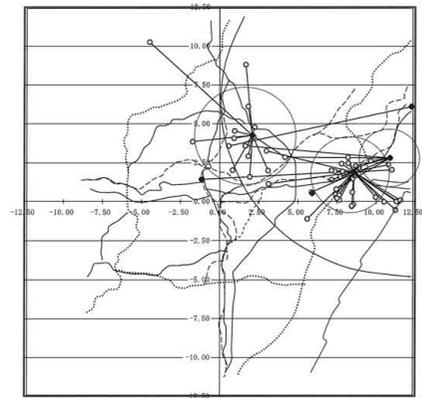


図11 G社の利用圏

⑤K社

K社は仙台では老舗の葬儀社で、1994年に本社に斎場を併設した。斎場としての利用圏は2.94kmで全体の傾向と同様であり、重心とのずれは0.6kmで全体の平均より小さかった。立地のよさと老舗の強みで全市から利用者を集めていると考えられる。(図10)

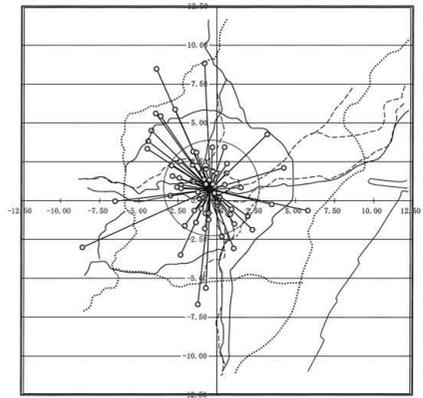


図10 K社の利用圏

⑦Kや

Kやは1995年から斎場経営を加えた葬儀業者のため、利用圏は2.37kmとまだ小さい。単独経営であるため、今後、他の業者との連携などが必要になると思われる。(図12)

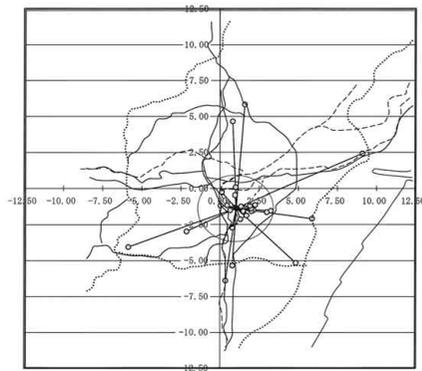


図12 Kや社の利用圏

⑥G社

G社は塩釜を起源とする葬儀社で、仙台進出が著しい。南光台はまだ新しいこともあって仙台市内居住者の利用は少なかったが、塩釜、多賀城方面の居住者の利用は多いようだ。(図11)

⑧Hだん

Hだんは1997年に設置された新しい斎場企業で、立地、知名度ともに日が浅く、掲載件数も少なかった。そのためか利用圏は0.63～2.57kmと小さく、地域密着型の葬儀を行っていることがわかる。今後、全市的な葬儀にどのように対応するのか検討が必要であろう。(図13)

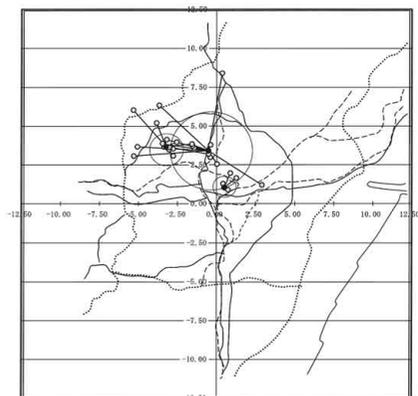


図13 Hだんの利用圏

⑨H殿

H殿は塩釜を起源とする葬儀社で、1996年に仙台市郊外に斎場を設置した。仙台市以外にも石巻などに斎場を設置している。吉成の斎場の利用圏は3.66kmと大きめで、重心からも2.6kmずれており、今後、利用圏を是正し、利用者を増やせる可能性があると考えられる。(図14)

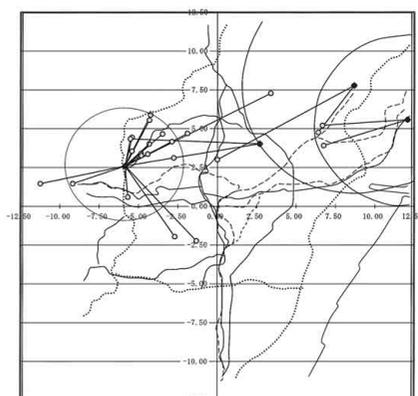


図14 H殿の利用圏

⑩その他の斎場

ひとつだけの斎場を経営する独立系の斎場は1998年以降に設置されたものが多く、河北新報等への掲載件数は少なかった。これらの利用圏は1.0～3.0kmと狭く、地域密着型の葬儀を行っていると考えられる。(図15)

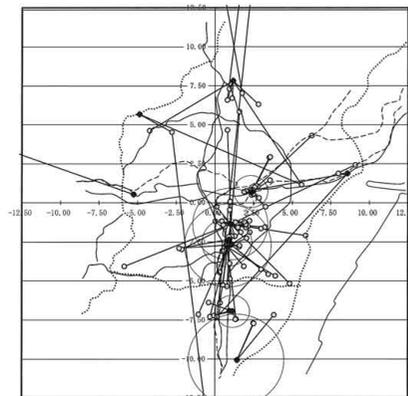


図15 その他の斎場の利用圏

⑪寺院

寺院の利用圏を図示すると、寺院の周辺に利用者が居住している場合が多いものの、仙台市を横断して寺院を利用している場合も多かった。これは高度経済成長期のニュータウン開発や核家族化の進行により若い檀家世帯が寺院から離れたニュータウンへと移り住んでしまったためと考えられる。このことは長

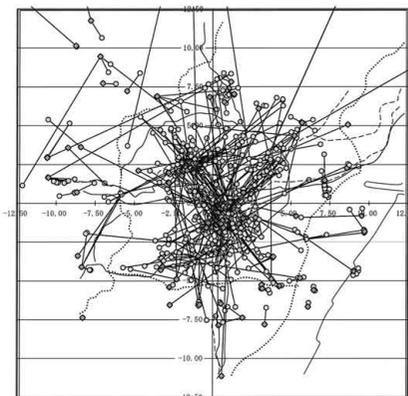


図16 寺院の利用圏

い目でみれば寺院と檀家との地縁的な関係を弱めることとなり、次の世代での斎場利用の

増加を暗示しているとも考えられる。寺院の利用圏は2.96kmもあり、地域密着型の斎場より大きかった。(図16)

(4) 立地と利用圏

図17は立地と利用圏の関係を5次の多項式近似させたグラフである。都心部では4km近くの利用圏があることがわかる。都心から2km程度の利用圏がもっとも狭いものの、都心から10km程度までは3km程度で推移する(実線)。10kmを超えると利用圏が急に拡大しているのは仙台市内居住者のみのデータを用いているためである。重心を中心とする利用圏(実利用圏)も同様の傾向を示している(破線)。一方、重心と施設とのずれは都心に近いほど小さく、郊外に行くほど利用者の重心がずれていく(点線)。(図17)

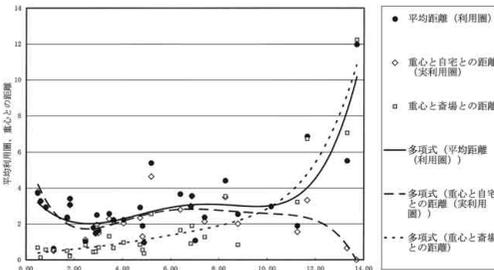


図17 都心からの距離と利用圏の関係

(5) 開設年と利用圏

図18は開設年と利用圏の関係を開設年と都心からの距離の関係として図示したものである。2次の多項式近似をしてみると、開設年が新しいほど都心との距離が遠くなっていることがわかる(実線)。斎場の郊外立地が増加していることを示している。また、開設

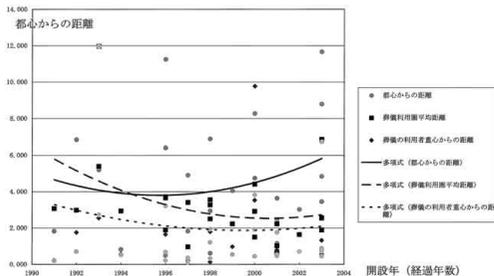


図18 斎場の開設年と利用圏の関係

年と利用圏の関係をみると(破線)、新しい斎場ほど利用圏が狭くなっている。近年の競争の激化や、老舗の強みを表している。また、重心からの距離(実利用圏)も新しい斎場ほど狭くなっていた(点線)。

5. まとめ

(1) 立地の特徴

斎場の立地は交通条件が重視されており、地下鉄沿線や幹線道路沿いに建設されていた。また、複数の斎場を運営するところは、全市的な葬儀は都心の会場で行い、地域密着型の葬儀は居住者の近くで行っていると考えられる。斎場と利用者との距離の平均(利用圏)は3.09kmであった。

(2) 寺院と斎場との違い

葬儀の過半数は斎場で行われているため、寺院での葬儀は全体の約30%にも満たなかった。

また、1寺院あたりの葬儀件数は3.2件で1斎場あたりの24.2回の13.2%に過ぎず、12回以上の葬儀を行っている寺院はわずかに2箇所、6回以上の葬儀を行っている寺院であっても23箇所しかなかった。空調完備で椅子座の斎場の快適さや読経に行くだけで布施の得られる斎場葬は寺院にとってもそれなりのメリットがあると考えられる。しかし、斎

表4 斎場の郊外化と大規模化

会場	特徴	費主・家族の負担	参列者	僧侶	
斎場	都心	冷暖房あり 椅子座 駐車場あり	楽 高い?	広範囲 社会的地位	楽 それなりの 収入
	自宅近く (郊外)	冷暖房あり 椅子座 駐車場広い	楽 高い?	近隣関係 自宅に近い	楽 それなりの 収入
寺院葬 (菩提寺)	冷暖房なし 正座 駐車場少	自宅に近い (遠方もあり) 普段からの つきあい 費用が?	遠い わかりにくい 狭い	大変 収入多い?	
自宅	狭い 駐車場なし	大変	行きにくい (プライベート)	それなりの 収入	
その他	ホテルや仏教 以外の宗教施 設など様々	—	—	—	

場葬の増加やお別れ会といった無宗教葬の実施は、檀家と寺院との関係の希薄化を進行させており、寺院の側としてもなんらかの対応を行う必要性を示しているとも考えられる。

(3) 開設年と利用圏

開設年が新しいほど利用圏が狭く、件数も少ない。斎場の過当競争期に入っているようにも見えるが、今後の高齢者数の増加などの推移によっては新規参入の余地がまだあるともいえよう。

(4) 新たな葬儀への対応

1991年以降の仙台市内での斎場数の急激な増加は、葬儀が「社会的な行事」として行われていることを示しているといえるが、近年の斎場の増加数の鈍化は、斎場側が今後の葬儀の変化に対応し始めたためとも捉えることができる。特に家族葬についてはS苑が小規模な葬儀専用の密葬会館を都心近くに設置したり、ホテル葬を行うホテルが現れたりするなど、家族葬が新たな需要のひとつとして浮かび上がってきていると考えられる。今後、今後斎場同士の提携やチェーン化など、新たな葬儀の形が芽生え始めているといえよう。

6. 今後の課題

- ①今回は「葬儀」のみを取り上げたが、通夜や告別式、お別れ会などの利用圏についても葬儀と同様に利用圏を分析する必要がある。また、葬儀と告別式の違いなど言葉の再定義も必要であろう。
- ②葬儀という文化は地域性が強く現れるため、仙台市のみならず他都市と比較することで立体的な分析が可能となる。札幌市のような会費型の葬儀との比較なども必要であろう。
- ③社会学からのアプローチでは、葬儀が社会的な儀式から家族単位の私的な儀式（葬儀の私事化）へと変わり始めていることが指摘されている。この葬儀の私事化が斎場などの立地にどのような影響を与えるのか、

時系列的な研究が必要である。

- ④近年、マスコミで取り上げられることが多くなってきた、自然葬や散骨などの多様な葬儀をどのように分析すべきか、研究方法からの検討も必要であろう。

7. 参考文献

- (1) 鎌倉新書：「葬儀白書」1997
- (2) 碑文谷創：「改訂葬儀概論」表現文化社、2003
- (3) 葬送文化研究会編：「葬送文化論」、古今書院、1993
- (4) 佐佐木邦子他「みやぎの葬祭ガイド」、北燈社、2002
- (5) 家族の私事化については、「渡邊千恵子他：『家族の私事化と葬儀の変化』、尚綱学院大学紀要、尚綱学院大学、2006、P131 - 137」に詳しい。
- (6) 本報告は2004、2005年度の尚綱学院大学共同研究費によって行った「現代社会における葬儀構造の分析 — 斎場の利用実態調査 —」の研究成果の一部である。